

哲学の道デザイン検討会議



第1回会議資料 2024.10.7

デザイン検討議題

01

第一回会議：哲学の道の概要について 今後について

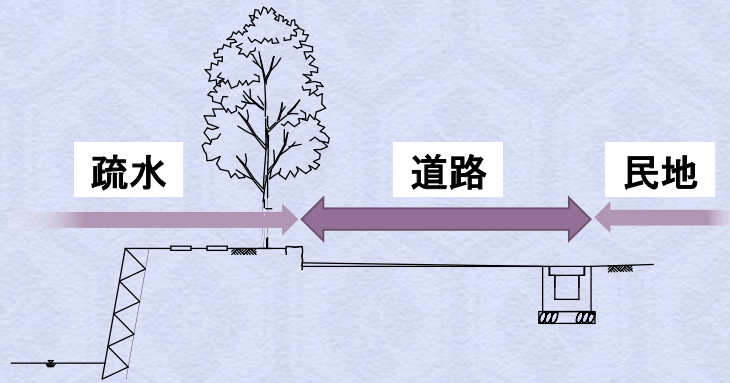
- 会議の目的
- 検討対象範囲
- 「哲学の道」の概要
 - ～ 由来・歴史
 - ～ 自然
 - ～ 路面の経過
 - ～ 路面の状態
 - ～ 道路交通法の区分
 - ～ 京都市への声
- 今後について

景観と安全の共存「哲学の道」整備事業において、景観面、安全面の配慮が必要となる哲学の道の路面に関して、周辺景観と調和した設計を進めるため、専門的見地及び地域的視点から意見や助言を求め、京都ならではの良質な道路空間を創出していくことを目的とする。



検討対象範囲①





由来・歴史

【由来】大正時代、京都帝国大学の西田幾多郎、河上肇、田辺元らの哲学者が散策したことから「哲学の道」と呼ばれる。

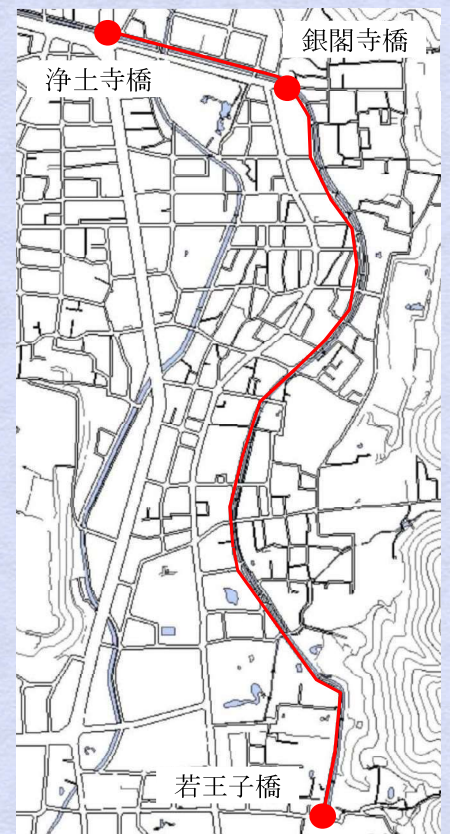
【歴史】銀閣寺付近では、江戸期に浄土寺村、南の安楽寺・霊鑑寺付近に鹿ヶ谷村が形成され、中央を白川が南流する農村地帯であった。

明治18年から23年まで行われた琵琶湖疏水工事により、蹴上から市街北方を迂回し堀川に合流する疏水分線が完成し、疏水に沿う小道として、京都市が昭和45年に市民の遊歩道として開いた。

「哲学の道」は疏水の管理用道路であったが、文人や学者が散策し思案を巡らしたこともあり、昭和後期に整備されて東山麓の散策道になった。

大正期から昭和期に入り京都市電今出川線・白川線の開業に合わせて白川通延長、鹿ヶ谷通新設など都市化が進み急速に宅地化していった。

現在では、「哲学の道」沿いに、疏水と緑豊かな景観が見られる。



(参考元) 千宗室・森谷勉久、京都の大路小路、小学館

— 哲学の道

・疏水分線 ・桜 ・ゲンジボタル(京都市登録天然記念物) etc...

◆桜

1921年、日本画家である橋本関雪が夫人とともに、京都市に約300本の桜の苗木を寄贈し、「哲学の道」沿いに植えられたことから「関雪桜」として親しまれている。

参考元:疏水事務所HP

◆ゲンジボタル

「哲学の道」では、毎年5月下旬から6月にかけて、ゲンジボタルが多数見られる。ゲンジボタルが市街地に接したところに生息していることは、大変意義深いものとして、1984年に京都市登録天然記念物に登録された。

参考元:現地看板

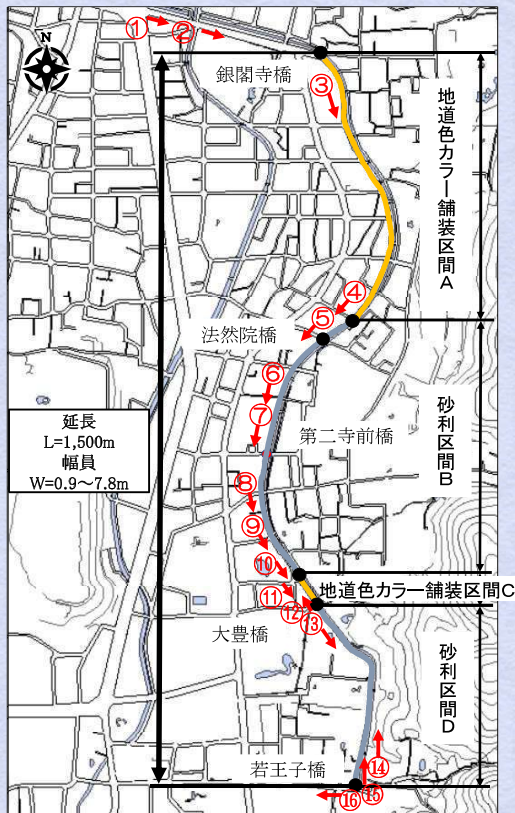


昭和60年代
・舗装済み区間

平成8年度
・舗装済み区間

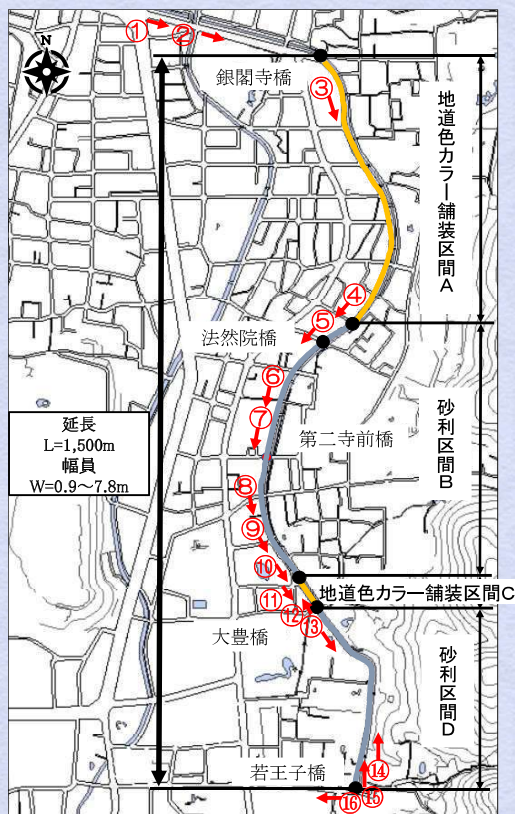
路面の状態①

08



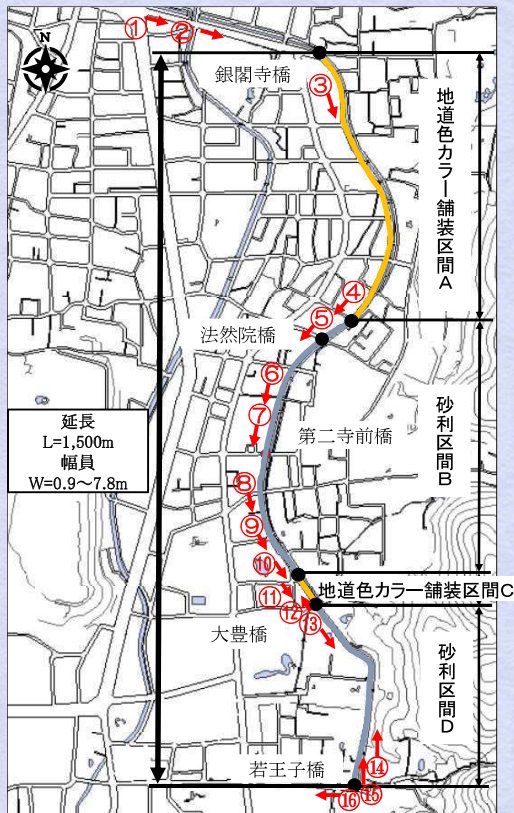
路面の状態②

09



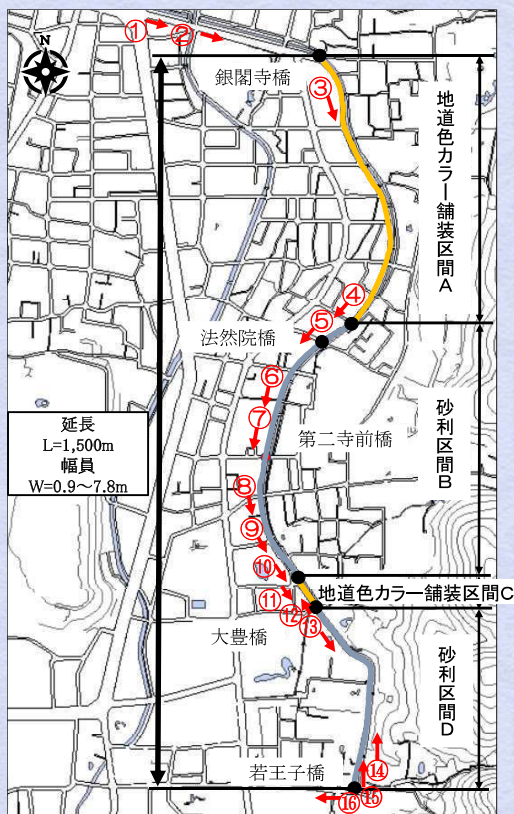
路面の状態③

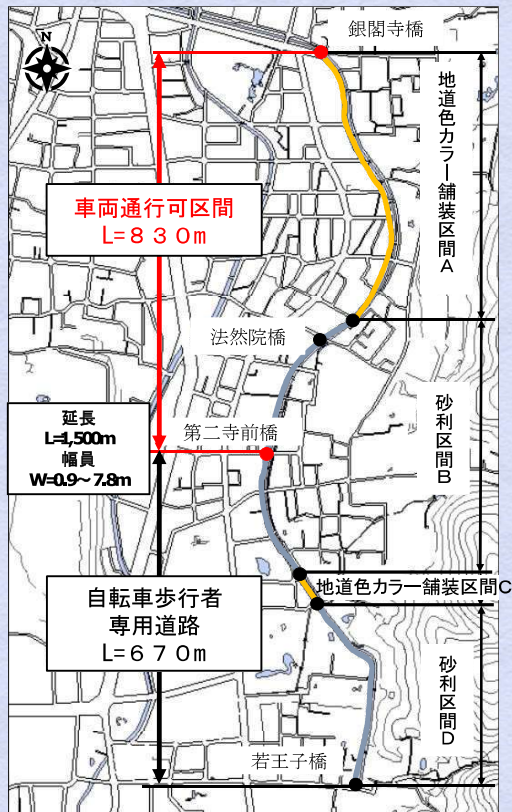
10



路面の状態④

11

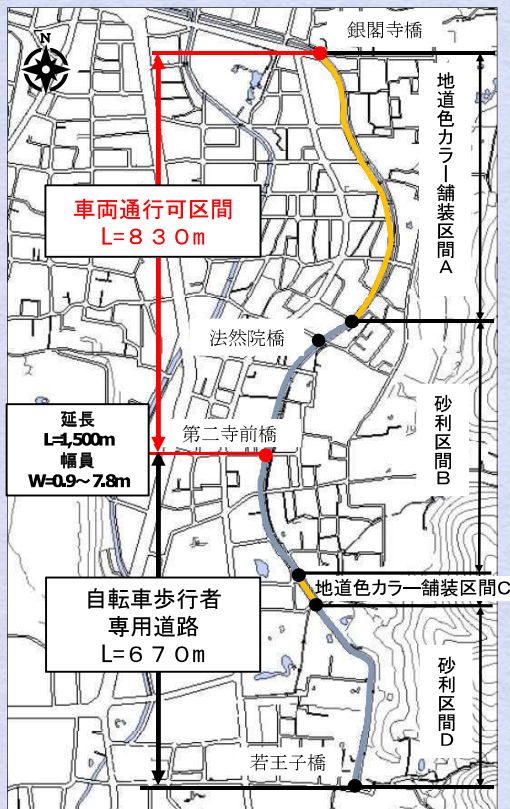




◆ 車両通行可区間(※)
銀閣寺橋～第二寺前橋

※土曜、日曜、休日の9時～18時は、
自転車歩行者専用道路

◆ 自転車歩行者専用道路
第二寺前橋～若王子橋



◆ 地道色カラー舗装区間への要望

- ・地道色カラー舗装が傷んでいるので補修してほしい。

◆ 砂利区間への要望

- ・道路上の砂利が砂埃とともに、沿道の敷地に入ってくる。
- ・雨が降ると水たまりができて、歩きづらい。
- ・車いすや手押し車では通行しにくい。
- ・町内地域の住民も高齢化し、散策が困難になっている。
- ・和装した観光客が、慣れない履物でつまづく。
- ・砂利の区間を舗装してほしい。
- ・砂利のまま残してほしい、哲学の道を舗装してほしくない。

◆ 全区間

- ・地道として、日常の維持管理をしっかりとしてほしい。
- ・哲学の道の整備にあたり、整備手法等のメリット、デメリットを説明してほしい。

etc...

今後、下記の観点を踏まえた路面のデザインを検討する必要がある。

- 道路利用者の安心・安全
- 親しまれてきた環境の維持と景観との調和
- 地域の方々等からの御要望